

Harvard Graded Direct Method Teachers' Group News Bulletin

第 16 号 英語教授法通信 1965年11月1日

編集・発行・英語教授法研究会 事務局 東京都世田谷区世田谷 2-1184 吉沢美穂方 Tel. (429) 5929

「英語を教える」か？

矢ヶ崎 庄 司

I

わたしたちの毎日やっている授業についていろいろな批判がある。英語を教えているのか、それとも英語について教えているのか、というギモン、あるいは不信が最高だ。近頃は、英語を教えるんだ、と返事をする人たちの数が圧倒的多数になった。そして、けんめいに、pronunciation drillとか、oral methodとか、LL 授業とか、いわゆる、speech のくんれんに力こぶを入れているし、実際にあまり熱心でない人でも、きかれれば、同じようなことをモグモグいうことになる。もちろん、その反面、教養、文化、アタマの体操、などと、反対論に固守する人たちの数も少なくない。

ところで一体、「英語を教える」というのはどういうことなのか？ きまってるじゃないか、生きた英語の4技能を不十分なく、のばすことさ、いままで、音声の面がヨワカタから、それを強調して、実用的運用能力をねらう授業をすることさ、というけど、なにを教え、どういう方法でやるのか拝見したところでは、お世辞にも、話どおりにはなっていないようだが、どうだろう。なるほど、中学から高校にきた時、発音はなめらかで、音読

させると結構イケル人がふえている。問答にも、てきぱきとこたえる。だが、いったん、かなり長い文を読ませて、内容把握の程度をテストするとみじめになる。さらに、こちらで、問いの文——つまり、どういう語で答えたらいいか、という cue——をあたえないとなにひとついえないし、書けない。どうも、「英語を教える」ということに、いささか誤解があるのではないかしら、という気がしてくる。

「英語を教える」というのは、英語国民の発音にできるだけ似た発音にし、サーカスのウマやイヌがムチひとつで、走ったり、止ったりするようにすることで、複雑なルールとその社会的心理的な表現の文型 (pattern) のひとつの variation を natural なものとして drill していく、ここだと思われるふしがある。それはたしかに重要である。ないと困るだろう。だが一体、naturalness とはなにか？ もっと根本的な問題として、ことばの機能とはなにか？ こうしたギモンにこたえることなしには、「英語を教える」ことはできそうにない。

II

近頃耳にすることばに Deep Grammar⁽¹⁾

というのがある。それはむずかしくて、そのうえ、あいまいな点が多いので、よくわからない。しかし、「英語がわかり、使える」のは音声が正確で、ある程度の vocabulary をものにし、文法の知識があるだけではだめだということを指摘した。ソシュールが、ことばをパロールとラングにわけて、パロールは一回だけのことだから相手にしないで、パロールの集積から共通項をとりだして、それをラングと名づけ、そっちの方が言語学の対象だといった。なるほど、それがいいとみんな考えた。しかし、このラングは、マボロシみたいなもので、あるかないか。結局抽象概念ではないか(2)。その点、Deep Grammar は、Generative Grammar ともよばれ、この一回性のパロールの本質にせまろうとするらしいから期待できる。わたしたちは、たえず、新しい文をききとり、新しい文をみずかつらくりだしている。この creativity のひみつを解明し、そのルールを発見しようとするのが、Deep Grammar のようだ。

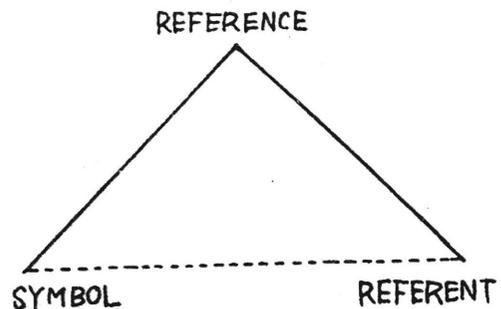
現場で直接、「英語そのもの」を教えているわたしたちにとって、この成果が、すぐに活用されるとは思えないが、しらすらすのうちにそれに近いことを経験的にやっているベテラン教師に会い教えられることが多い。

ベテラン教師であまり英語の得意でない生徒を教えていると、たとえば、「注意をあたえなければいけないだろうか？」という意味のことを英語でいわせる場合、すぐに、Must I advise her? とかいわせてもむりなことが多い。具体的な場面をあたえて、そこで考えられる英語の文をつくらせることになる。Advise をつかえないとだめだから、それをあたえてしまうというせっかちをしない。徐々に場面のむだをはぶいていく。こんな文になって表われるかも知れない。Do I have to say something about it to her? そして、

new word を教えるのはべつするとき、たとえば、リーディングのとき、にすべきだ。(3)

この過程で起っていることはなにか? そこでは、ことばの本質が問題になる。実用的におおまかない方をすれば、ことばはすでに概念である。地図と現地のタトエをつかえば、地図である。(4) 地図にしても、縮尺はさまざまである。コージブスキーは「抽象のハシゴ」というのを考えた。おもちゃのヒコーキの翼がはずれたとき、1才10月のむすこが「ママ、ヒコーキガコワレタ」という。ママは「ヒコーキノツバサガハズレタ」と教える。「コワレル」の守備範囲と「ハズレル」の守備範囲ではずいぶんちがう。赤い絹のリボンがスチール製のつくえにのっているとき、犬がむこうの木の下でねているとき、探している家が丘の上に屋根だけみえているとき、It is there. ですむ。すなわち、general から particular にと、ことばの学習をすすめる。もちろん、そこにはコンテキストがある。話を具体的にするためには、particular がいいというのは、コンテキストを忘れていて、General で concrete なものがいえるはずだ。そこで、問題は、できるだけさまざまな状況を概念化、すなわちシンボル化、できるようなことばと、それをのせる Deep Grammar で考えるような頭の中のルールに近い文構成の仕組みを教えることから始める。(5)

オグデン＝リチャーズの三角形で説明すれ



ば, symbol と referent の部分について, いくつかの referent たとえば, 「ツクエ」「ホン」「ハコ」etc. がひとつの symbol たとえば, thing であらわせる. 逆に, いろいろな symbol, たとえば, a boy, my friend, Kiyoshi, etc. が「ショーネン」——ひとつの referent から発生する. 常識的に, one-word-for-one-meaning は否定されている. しかし, それから先のことは経験にまかされている. リチャーズは, メタファーで説明する. (6) メタファーとはアリストテレスの考えたように特別の才能ではない, ことばをつかうことはメタファーをつかうことだ. このことは referent と symbol には含まれた reference のからくりで光をあてることになる. ことばの意味は, ブロックをつみ重ねて全体をなすのではなく, 植物のようなものだ. 幼児は, 知っている語をたくみにつかって, 新しい状況の認識を客観化する. それが社会的に認められると, 親はみすごし, それが社会的に認められないと, 訂正したり, 奇抜さをわらったりする.

つまり, ことばの一回性を大切に, 学習者の creativity を認めて, 「英語を教える」べきだ. Naturalness とは音声面は口うつしにならざるを得ないが, つかう人次第で伸縮自在な vocabulary をその守備範囲の general なものから particular なものに進めるべきだと思う. 単なる frequency だけでは解決できない. Syntax でいえば, A is B, The boy will give a book to the girl など状況の切りとりにどうしても必要な型から入らないとこまる. 英語だけの授業はムリだというのは, ある程度まで別の方法で進んでいるクラスでは当然だろう.

なんでも習った英語でいえるようになっていないからだ. まず general なレベルでなんでもいえるようにして, それから, 新しく

学ぶ面を, やや particular なレベルに細分していく. そのとき, 狂言まわしの役をするのは初歩の段階ではメタファーである. 学習者の creativity である.

「英語」を教える, というのは, こうした point of view から, 整理され, 段階のつけられた教材を教えることであると考えている.

やや程度が高いところで, 長い英文を読んだり, 書いたりする場合も, だいたい, 同じようなことがいえると思う. まとまった内容を読んで, 読者の立場でそれぞれのレベルに応じてわかればいい. その中にふくまれた, 新しい状況のきりとりで気がついて, それを production のために storage に入ればますますいい. 書くときも, 日本文を与えられて書くのがよくないのは, 書く人のレベルを固定化してしまうからだ. その日本文と同じレベルでものを考えてないものに, どうして英語で同じ状況が同じレベルでいえるか? あたえられた日本文すらわからないのではないか?

物理的に存在する状況 referent はあくまで, symbol できりとられた状況ではない.

もうすこし, しらべて書くべきだったろう. 問題は重要なので, ふだん考えたり, 気になったことを述べた. 誤解されるかもしれない. でも, 100% のコミュニケーションは期待できないし, 誤解とは読者がわからぬ書き手への意味の止場だそう. (7)

参考書

(1) Deep Grammar について, 勇康雄「Deep Grammar」English & Pedagogy for High School Teachers No. 4 Sanseido

(2) 片桐ユズル「意味論入門」思潮社にソシュールの言語(パロールとラング)の批判が簡単にかいてある.

(3) 室勝「500語でできる英会話」評論社、は語数を制限して、その中で最大限に状況をきりとる方法を教えてくれる。

(4) 地図と現地のタトエは、コースブスキー、ハヤカワ、チェイス等の一般意味論の基礎になっている。コースブスキー「科学と正常」、ハヤカワ「思考と行動における言語」岩波書店。

(5) 「English Through Pictures」と吉沢美穂「絵を使った文型練習」大修館。特に吉沢本の「解説—Situationによる文型練習」は具体的に有益である。

(6) I. A. Richards 「The Philosophy of Rhetoric」の中の「メタファー論」

(7) 外山滋比古「近代読者論」垂水書房
「修辭的残像」垂水書房
「文学」Vol32.8「表現と理解」

* オグデン＝リチャーズの三角形は
「The Meaning of Meaning」

* メタファーについて、片桐ユズル
「メタファーと外国語教育」GDM Publications

* 室勝——心理学の教えるところによると、いい理解というのは、知識の構造が流動的になっていることである。すなわち知識が固執的でなくて、ひらたくいえば、融通がきくようになっていることである。このことは発表能力としてはたらく語学の知識にもそのままあてはまることであって、たとえば、単語の意味の理解においても、その語を意味上の可能性においてつかむことが大事である——

(片桐ユズル「意味論入門」に引用されたものより)

(ヤガサキ・ショウジ、都立武蔵高校教諭)

夏季講習会雑感

小林 祐子

7月26日から1週間にわたって開かれたGDMの夏季講習会に参加させて貰ったが、これまでミシガン教授法のオリエンテーションのみを受けて来たものとして、今までの教授法のあり方に再検討をよびかけられた会であり、今後のあり方について沢山の課題を背負わされた思いがする。非常に“thought-provoking”, “action-provoking”な会であった。

この際自分自身の考えを整理する意味からも、講習会で質問にも出た“ミシガン教授法”と“GDM”との違いについて少し考えてみたい。

もう大分以前の話だが、シカゴ大学の F. B. Agard と H. B. Dunkel 教授が米国の第二外国語教授法の現状を調査し、その報告書に新教授法(ミシガン)の特徴として、「この方法が立つ基本的な仮定は、第二外国語は母国語同様、はなし言葉のなかで一番自然に習得出来るものだ」と云うことだろう。従ってこの方法では耳と口の訓練がはじめに行われる。」とかいた。これを読んだフリーズ教授は、「根本的な誤解」だと反論して、“Language Learning”の中で、ミシガン教授法の基本的特徴を次のように説明した。「もしわたし達の method の何が“fundamental feature”かといわれるなら、科学的に整備された教材にあると答えない。生徒の母国語とこれから習おうとする外国語の正確な記述と、その比較からわり出した“trouble spot”

を重点的、組織的にとりあげて、これをもっとも効果的に配列した教材、これが新教授法の生命である。」

さて、GDMとの比較で大きな違いと感じたのはまずこの点にあった。GDMでは、その教材に生徒の言語背景を考慮にいていない。人間が生活体験をしたら、その体験をひとに伝達したいと云う“communication”の本能的欲求をうまく把えて、“situation”に密着した表現を、簡単なもの、機能性の高いものから複雑なものへと密度高く細かく段階づけて教えていく。これがGDMのいき方と推察した。言語習得のむづかしさが、自国語と外国語とのかねあいにありと云うミシガン教授法のrelativityの線に対し、GDMでは習得しようとする言語に内在する問題として、これをgradingで解決しようとする。だから生徒の言語背景を考慮する必要がないのだろう。ミシガン理論にもとずいて発音の段階で効果の結果を得たものも、日本語と英語のsyntaxの比較の「空しさ」に挫折感を味わい、この段階でのgradingの指針をどこに求めるべきか戸惑っているものも多い。そんなものの一人として、GDMのいき方に非常な刺激を与えられた。

さて、先にのべたミシガンの考え方にたてば、言語の科学的比較によって割り出された“trouble spot”に重点的訓練をほどこし、これをマスターさせるための“pattern practise”, “substitution drill”が当然のこととして必要になる。が一方GDMでは、situationから肌で感じとる刺激が生徒の頭に「必然的」に一つのpatternを生み出してくれるように教材が方向づけられているから、こうした練習のテクニクは第一義的な意味を失う。教材と練習方法にはこのように密接な関係があるので、その一方だけをとりあげて云々出来るものではない。然し、たしかにミシ

ガンの練習方法には生徒のイニシアティブを殺し、機械的になる危険性がある。「正しい形」を生徒の口にきじで流しこみ、生徒がしゃくする迄その形をくりかえすといったミシガン流のやりかたに対し、situationから生徒に正しい形を割り出させるGDMは、学習心理の上からいって一步先んずるところがあるのではなからうか。こうして生徒のとり出した形を補強する意味でのpattern practise, substitution drillなら、また別のよい意味があると思う。

まだ他にあげたいことが沢山ある。紙面の都合で割愛しなければならないが、生々しい実感としてこの方法について感じたことを最後に一つだけいわせて貰いたい。それは無味乾燥な繰り返しにおろいりやすい初期の語学教育をこの方法が、教師にとっても生徒にとっても創造的な仕事にしていることである。効果的な新教材導入のために、教師はあらゆるresourcesを使って、新しいsituationに対する生徒の反応を正しく刺激することを要求される。そこには教師にとって創造の物が市広く残っている。又、生徒も一つの段階から次の段階にすすむとき、前に習得したことを新しいsituationにあわせて自分で応用する自由が与えられている。物まねでなく自分で考えたことがそのまま通用するという喜びは生徒に自信と前進への意欲を与えることだろう。(コバヤシ・ユウコ、ICU講師)

~~~~~  
One generalization which has significant implications for classroom teaching is that anxiety appears to facilitate performance in relatively simple types of learning such as conditioning but interferes with performance in more complex learning tasks. — Ellis, *The Transfer of Learning*.

## Basic English

おぼえがき (6)

この夏学校の雑誌に出すつもりで、Basic English で短いものを書きました。題は Basic English as a Sorting Machine というのです。それを書きながら考えたことは、Basic English は英語の核のようなもので、full English の入門として学ぶには最適なものであるのはもちろんですが、またその中には universal な semantic units とでも言うべきものが含まれているにちがいないという考えです。これは、Basic English をひいきする者のすぐく勝手な考えのようではありませんが、ながい間 Basic English に親しみ、semantics を勉強し、英作文の教授を仕事として来たわたしの頭の中では、まことにむじゅんなく成り立つ考えなのです。こういう考えはしかし Sapir-Whorf の見方にしたかうと少々おかしいであろうことはわたしも承知しています。しかし Sapir-Whorf 流の考え方も一つの仮説であるならば、わたしも一つの仮説を立てさせてもらいたいのです。たしかにエスキモーや、アメリカ・インディアンや、その他もろもろの、ヨーロッパ語の系統とはおそろしく違った vocabulary や syntax を持った民族があり、その民族の認識の仕方や、考え方が、ヨーロッパ的なものとは非常に違っているであろうことはまちがいのないことでしょう。

主部と述部にわけて論理を追うことをしない人々がいることさえもほんとうでしょう。しかしもし心理学が、あらゆる人間の心の説明に大体適用できるものであるならば、人間の精神活動が一定の段階にまで達したときに

は、各民族の認識の仕方や考え方の違いの奥に、共通な sense units によって分析を許す場があるにちがいないというのがわたしの仮定です。そして、もしこういう sense units を現存の language の中から求めようとするならば Basic English の中からであろうというのがわたしの考えです。わたしたちが生れて最初に持つ基本的な emotion の一つは fear であることは心理学の教えるところです。しかしこの fear にあたる語を持たない民族があるかもしれません。Fear をもっと分化させて、いくつかのちがった語によって代表させているのかもしれません。また反対に fear をもっと一般の不快の emotion にふくませて、fear よりも coverage の大きい語だけしか持たない民族があるかもしれません。もしこういうことが事実であるとしても、やはり fear という Basic の中の一語が、その人たちの心の動きの分析用語として力を持ち、彼等の言語と思想とのもつれをときはごす道具として大いに役に立つのではないかということです。Fear はもちろん一例にすぎません。Basic English の中からはこの種の語が何百か見つかるはずであると考えています。こういう仮定は少々 Basic English につかれたもののひとりよがりに見えるかもしれませんが、この方向に何かの仕事をする足がかりとして、かならず有効であろうと信じています。

(ムロ・マサル、早大講師)

~~~~~  
Werner (1930)... found that students above average in intelligence were able to profit from foreign language studies when tested on their ability in English whereas students of average intelligence were not. — Ellis, *The Transfer of Learning*.

打田 鏡一

ぼくがはじめてマスカワさんの顔を見たのは杉並高校へ入学してすぐやったテストの時だった。ヒアリングのテストの時いきなり入ってきた男の先生が「ではこれからボクがとてもいい発音でよみますから質問に答えて下さい」といったので、ヒドイ発音かと思っていたらホントに良い発音だったのでびっくりした。一年の一学期をマスカワさんになり、さて、二学期になってみると彼はモハヤ日本にはいなく、かわりにぼくらの教室にはカタギリさんがいた。あとで考えてみるとモトモトらしいのだが、どうも彼の日本語はその頃のぼくらの耳には、とてもぎこちなく、日本人がしゃべっているのではないみたいにひびいたし、おまけにぼくらの聞いたこともないような「カタギリ語」をしゃべるので、ぼくらのうちの何人かは彼が日本語をしゃべるたびクスクスわらい、また彼のコトバを理解するのに苦しみもした。がそんなのは良い方で、ぼくなどは彼が日本語をしゃべっていて、とてもムズかしくて漢字で書けといわれてもとてもわからないようなコトバをしゃべると、「ヘーよくこんなコトバを知ってたなあ」とトンチンカンな感心もしたものだ

った。一年の二学期の Grammar はカタギリさんで Reader は別の従来からの教え方の先生だった。それから半年たち二年の一学期から再びマスカワさんは日本の土をふみ、ぼくらに Grammar を教えることになり、カタギリさんは Reader を受け持った。この時、ぼくはカタギリさんが、検定教科書いかに使うか内心心細かったが、他の教材となんらかわりなく、プリントなどで補充したり、いらぬところは遠慮なくけずったりして、みごとに GDM のやり方で教えたのには感心した。それから一年間はそのままだったが、三年になった時、その二人は、突然杉高から姿を消した。残念ながら僕が GDM の先生に習ったのはそれだけだった。

それにしても高校に入学してからの英語の時間にはおどろきどうしだった。ほとんど日本語を使わないことは、英語の時間は日本語を使わない方がいいんじゃないかと前から思ってもいたし、またそんな授業があるらしい事は知っていたので、それほどでもなかったが、何よりもおどろいた事は、あまりにやさしかった（そう見えた）からだった。とにかく、中学を一応おえた者にむかって“I”から教えはじめたのにはびっくりした。がそのころはまだ純情で先生のやる事は何でもいい事だと思っていたから、やさしすぎるといって逆らいもせず、おとなしくついていった。それから、おどろき、また感激させられたのは EP だった。なぜかというとなれには数十カ国語で本の使い方が書いてあり、何よりもそれは「洋書」だったからだ。それは幼い僕の好奇心とエリート意識を満足させるに充分だった。EP をながめるのは楽しくてしょうがなかったし、「俺はこんな本を使ってんだ」と、他の高校へ行った者に会っては吹聴してよろこんだ。中味も絵本みたいで楽しくてよかった。が、内心あまりやさしすぎて不安も

感じていたので、家では丹念に一つ一つ意味を書いたり授業中先生の云った例を書いたりしていたが、やはりそれは僕の英語にかなり役立った様に思えるし、シケンの前など女の子が、ノートを見せてくれと来るので、女の子と仲良くなるためにも役立ったが、それは決して彼女らの英語の力を増しはしなかったらしい。

さて、例の二人だが、彼らの授業は実におもしろかった。今僕が持っている英語の知識はほとんど彼らの授業を通しておぼえた事だ。それは一番おぼえやすいとされている高校時代に習ったからではなく、やはり彼らの教え方がうまかったからだと思っている。

とにかく、何よりも彼らには教材が豊富だった。マスカワさんは映画やテレビの話をするのがやたらと好きだったし、カタギリさんはやたらとレコードをかけ、しまいには校舎中にひびきわたるような声で、歌もうたいだした。僕が好きな歌の中で、授業中彼に習った歌はかなり多い。映画やレコードばかりでなく、そこらにある物は何でも教材になった。マスカワさんは、おとなしく座っている一人の生徒をいきなり黒板のところへひっぱりだして、ぼくらのドギモを抜いたし、カタギリさんが、ニヤニヤ笑いながら、ぼくらの方へ近づいてくると、やにわに机の上の物を整理し、机の中へしまいこむ人もいた。

マスカワさんの授業ではしばしば「こりゃハナシカになった方がよかったんじゃないか」と思わされたり、カタギリさんには恋愛作法を教わったりした。この様に彼らはぼくらの気持をひくのが実にうまかった。コトバを変えていえば、彼らの授業は僕らの生活と遊離していなかったという事だろう。時として僕は彼らと授業中に英語で世間話をしていくかのような気もしたのだった。

(ウチダ・エイイチ、都立杉並高校卒業生)

Book Review

「意味論入門」片桐ユズル著

著者はGDMのあの片桐さんである。片桐さんは、GDMの先生として第一級のうまえを持ち、研究熱心な学者であることは、みな知っているが、彼が詩人としても有名なことはあまり知られていないかもしれない。この本は、教師としての彼、学者としての彼、詩人としての彼が、「ことば」という一点に集ったところからできあがったと云える。

「落語でおなじみのハッサンとご隠居さんが登場、そのユーモアにみちた会話の中に高度に学問的な話題をおりこみ、言語表現のふしぎさおもしろさを知らず知らず身につけさせてしまう買って損をしない本」という、この本の広告文に、その内容はよく表現されている。さらにGDMの会員ならば、GDMが彼に大きな影響を与えていることを知り、GDMが実にうまく織り込まれているのを見て「なるほど!」「うまくやったな!」と、一般の読者にはないであろう特別な感銘をうける。

日本の学者のなかには、むずかしいことを発表し、読者にわからないならば、わからないヤツが悪い、と思っている人も多いようであるが、本は communication の目的で書くのだということを考えれば、彼のやりかたは大成功だと云えよう。ある種の学者からは彼のやり方は邪道だと悪口を云われるかもしれない。けれども、こんな本を書くのは、むずかしい研究論文を書くのよりも、より深く、より整理された「ガク」がなくてはできないものではない。また「ガク」に加えて特別の才能がなくてはできないのはもちろんである。

この本は、まず気らくにねころんで読み始め、セミナーと呼ばれている練習問題の途中でむっくり起き上がり、読み終って、「おそ

れいりました⁴と最敬礼で最大の敬意を表し、またもう一度始めから、こんどはゆくり読み返したくなる本である。まったく「買って損をしない本⁴」としておすすめする。

(思潮社, 214頁, 680円) — 吉沢

「絵を使った文型練習」吉沢美穂著

前から欲しいと思っていたものがやっと本になった。この本の書かれた意義はいろいろあろうが、私にとっては、E. P. をいかに教えるかだけでなく、現場で制約された教科書を使いながらも、この教授法を実践して行ける手かかりが得られたのが一番うれしい。

一時間の授業の中で一番やり甲斐があり又苦勞もするのが新しい文型の導入である。現行の教科書でそのままの文を使って新しい文型を導入出来る箇所は少い。もっと simple で具体的な situation から出発する必要がある。その situation を与えてくれるのがこの本である。英語の教授法の本は数えきれない程あるが、どの本も何とか method の解説ばかりで、実際に明日教壇に立って関係代名詞をどう教えるかを答えてくれる本はなかった。その結果、関係代名詞は「～する所の」であり、「make は作るという意味ですよ」で授業がすすめられる。ところがこの本では、生徒の身近な situation を与えて生徒に興味を持たせ、知らず知らずのうちに、新しい word order を身につけさせる。10年の実践に裏づけられたこの教授法は学習者に対する心理的な配慮と合理性にあふれ、従来の日本語二英語の往復やオウムのような pattern practice とちがって画期的である。ただし、この本に書いてある通りに、最初からスナリやりとりをしようと思ったら、たちまち生徒のダンマリ立ちん坊に悩まされるだろう。これを骨組にこれをヒントとして、さらに肉づけが必要であるし、効果的に教える為

は、解説にあるような生徒と教師の間の rule がしっかり確立されている必要がある。しかし、そういうことが出来ない場合でも、この本の絵の描き方からだけでも学ぶことは多い。この本の絵をみているとこれをヒントに自分の idea を盛った絵を書いて教室に持って行きたくなる。ちょっと気になったのは、教室に実際持って行ける絵と、絵を使うのではなく、実際の situation を使ってやることを絵に表わしたのが同じ要領で描かれている点で、誤解をされるおそれがあるような気がする。

Workbook の問題も、既成のものでは英語二日本語の往復が必ずどこかにあって、もどかしい思いをした。既成の workbook もごく初歩の段階では situation を大切にしてい、絵などで表わしているが複雑になると、文字にたよるのが普通である。この本では最後まで一貫して situation を考えねば出来ないような問題ばかりである。中学の教科書もだんだんと situation を重んじる編集方針に変わりつつあるように思える今日、この本の果す役割は大きい。(大修館, 本文99頁, ワークブック29頁×3冊つき, 650円)

— 升川綾子

News : にゆうず : ニューズ

恒例の公開講演会は6月5日新宿厚生年金会館で「意味と外国語学習」をテーマに行なわれた。午前中は Ege 教授の Native Speaker 批判、井上教授の構造言語学的意味論、それに吉沢さんの講演ともり沢山、午後は伊木、高橋、片桐さんによる実演授業と充実していた。なお Ege 教授の講演は活字になって、「現代英語教育」9月号にのっている。案内状発送その他で大活躍の升川潔さんはこの日40度の熱を出して沈没。人間であることを証明。

Summer Seminar は7月26日~31日までルーテル英語学校で53名の参加で行われた。例年になく涼しい?夏でみんな熱心に研究した。今年の特徴は、北は帯広、南は鹿児島まで参加者に幅ができたことと、参加の先生方はいずれも active であったこと。

玉川学園の樋口豊治さんは、生徒をひきつけてイリノイ州マンモス・カレッジへ行き、田舎のおちついた雰囲気が気に入って当分アメリカから帰ってきそうもないと心配されたが無事帰国、10月28日の例会で報告をきいた。

絵を使った文型練習が7月末大修館から出た。どんな教科書を使っても、文型の導入に使えるように字引形式にしたところがミソ。Workbook が3冊(各70円)ついているのが、GDM会員にとっては利用価値がたかい。Workbook だけ大量にまとめて買うときは最寄の書店から大修館にたのむのが便利。

片桐さんの意味論入門が各方面で好評である。おもしろく読ませ、しかも学問的な正確さを失わない(読売新聞——島田一男)。ふざけちらしたようでないながら眼目と背骨は実にきちんと通っている。わが国の戦後文化における一つの注目すべき所産というをはばからない(読書新聞——市川三郎)。

比嘉正範さんは関西学院大学助教授として日本へもどってきた。吉沢さんといっしょにリチャーズ博士のもとでまなび、さらに John B. Carroll について言語心理学で1962年に Ph. D. をとって、Northeastern University (Boston) でおしえていた。論文に Psycholinguistic Concept of "Difficulty" and the Teaching of Foreign Language Vocabulary (ちかく Language Learning にのる予定) などがある。この言語・学習心理学者をむかえて、われわれはたいへん心強い。

Basic English as a Sorting Machine

という論文(英文)を室勝さんが書いて、ちかく「人文論集」(早大)にのせる。約30枚の力作。ほしい人は室さんにたのんでおくといい。

ICU Bulletin の最近号には、日本語について村木正武さんの2つの論文と、ナイダの意味論、井上和子教授の論文などがのっている。

Filmstrips for English Through Pictures は、2 series にわかれていて、1 series ¥15,320でタトル商会にたのめば、あちらからとってくれる。それからレコードが絶版だというウワサがあったが、ウソらしい。

会員名簿1965年版ができました。地番変更転居、転任、退会などの消息は、名簿でたしかめてください。

English Through Pictures, Books
1 and 2.....¥ 220 each

First Workbook of English
(大判).....¥ 240
(ポケット判).....¥ 170

First Steps in Reading English
.....¥ 170

Teachers' Handbook for English
Through Pictures.....¥ 400

Anglophone Records for English
Through Pictures, Series 1 and 2
.....¥ 6,000 each

Filmstrips for English Through
Pictures, Series 1 and 2
.....¥ 15,320 each

チャールズ・E・タトル商会

神田店 東京都千代田区神保町1-3
TEL. (291) 7072

高島屋店 東京都中央区日本橋高島屋
6階 TEL. (211) 5029

Letter from Kobe

片 桐 ニズル

まず反応ののろさにおどろいた。そのひとつの理由は、彼女たちはなんのために学校へきているのか？ 英語をならうとはなにか？ 彼女たちにとって、それはクンレンではなかった。一種の上品なヒマつぶし——洋裁や料理ほどにも役に立つのでもなく、そのクラスで、りこうそうな顔をして、頭をからっぽにすわっていれば（一種の Zen？）しぜんと教養が身につく、精神がたかめられれば、姿もうつくしくなる——英文科とはそういうところなのだった。

もうひとつの理由は、つぎの4サイクルである。

Teacher: Where do you live? ①

Student: アナタワドコニスミマスカ? ②

ア, ソーカ, コーベダワ

ワタシワコーベニスミマス ③

エート, I live in Kobe. ④

こんな程度の Question でも、いちいちニホン語を経由しないと、英語でこたえられないらしいことが、だんだん、わかってきた。

つぎに大学祭で自分たちの研究の成果を展示するから、それをみてやってくれときた。しょうがない、ACC へでもいって、百科事典でもひいといで。

ひいてきましたけど、どう訳していいかわかりません。

訳なんかどうだっていいじゃないか。ようするに、ballad とはどういうもんだか、かいつまんで、いっばんのひとにわかるように説明したらいいでしょう？

英語のままじゃいけませんか？

てめえたちだって、どこに何がかいてあるかわからないものが、やつらにわかりますかってんだ。英文科のくせに、これぐらいの英

語にへこたれてちゃあ、しょうがないじゃないの!?

要するに、パッとみて、どこに自分が必要とする information があるか、わからない。（この練習のために、ぼくはアメリカ史を、わざと1時間で1章という速度ですってばして、毎時間かならず、その章をはじめから、おわりまでめくらなくてはできないような questions をつくり、answers を英語でかかして出させる。）とにかく、速読ができてないということは——直読直解でないということは——さっきの4サイクルのせいだ。

それから、reading においても、referent といういみでの意味をとることが、訳文をいれることによって、ボカサレル。訳文がことなれば、意味 (referent) まで、ことなつたものを指し示すかのごとき錯覚を、学生にあたえる。しかし英語で question すれば、そういう感じはおこらず、fact に即して問答するような気になるものらしい。

もちろん、はじめから GDM でやれば、いみとは situation である、ということがしつかり身につくから、ちがうことばで、おなじ指示物をさしても、おなじことばが、ちがう指示物をさすことになつても、なんともおもわない。こういう意味論的な態度がいつのまにかやしなわれる、ということが、外国語学習の教養面のひとつだとおもう。

しかし、“I see apples” と “I like apples” は、おなじ文型だからといって、like のような実証不可能な動詞から教えはじめても、referent をつかむ態度はそだたない。佐藤首相や椎名外相のような美辞麗句（ジョンソンにもそういうところがある）でも referent のはっきりしないはなしは、国際的に通用しない。GDM のナカミ主義は、いいクスリになるはずだが、もはやききめのないほど、ニホンの墮落はすすんでいるのかもしれない。

絵を使った文型練習

国際キリスト教大学講師 吉沢美穂著

英語入門期に視聽覚的な教授法が役立つことは論をまたないが、その効果的な用法は十分に研究されていない。本書の著者はハーバード大学のI・A・リチャーズ博士のもとで言語伝達の理論に基づいた英語教授法を学び、爾来十余年にわたる研究と実践を一冊にまとめた。ここに扱われた文法事項、語法、基本語は三百に及び、教科書の種類、学年に関係なく、ページを開けば絵を使った文型練習が得られる。練習の効果を高めるために初・中・上級別のワークブックを添えた。

中学校、高校、講習会、家庭での学習に最適！

A5判函入(テキスト一冊

ワークブック三冊添付)

好評発売中 定価六五〇円

新刊

英語の発音——指導と練習

鳥居次好 兼子尚道著 五七〇円

楽しい教室英語

メリー・北島 奥田夏子著 二〇〇円

英語への招待

上野景福著 三三〇円

英語展望台

沢正雄 速川浩著 二五〇円

アメリカ風物鶏肋集

吉田正俊著 二五〇円

アメリカ留学への道

福田邦彦著 四五〇円

構造言語学の輪郭

安井稔著 五八〇円

英語構造の理解と演習

ハロルド・V・キング著 四九〇円

英語語法事典

石橋幸太郎他編 九八〇円

東京都千代田区神田錦町3-26 大修館書店 TEL (291) 3961-5 振替東京40504